2017年12月4日

小諸市協働連携事業調査研究活動による提言書

中山間農村の地域開発：小諸市滝原区の事例から学ぶ

重冨真一（明治学院大学国際学部教授）

目次

１．はじめに
２．調査地の概要
３．学生の問いに対する地域リーダーのレスポンス（応答）
４．小諸ヤバい―学生の驚き―

１．はじめに

日本の中山間地域は、現在、農業の面でも、また地域振興発の面でも様々な課題を抱えている。地形上、土地利用型の農業では競争力のある大規模経営が難しい。平野部に比べると兼業機会が少ないため人口流出、とりわけ若年層のそれがおきているエリアも多い。面積的にも、また人口の上でも大きな部分を占める中山間地域の活性化は、農業生産、地域経済、環境保全の点で、きわめて重要である。

小諸市は浅間山の南斜面に位置し、その大部分がこの中山間地域に属す。そのため地域社会と行政の両方が、地域の活性化に取り組んできている。今回、明治学院大学国際学部重冨ゼミは小諸市を訪問し、そうした取り組みの一部について学ぶ機会を得た。訪問したのは重冨ゼミの 3 年生 13 人と重冨の計 14 人である[1]。ゼミ生は 3 年の春学期から日本の戦後農業・食料事情の変化と日本の農村社会構造に関する学習をおこなってきた。また夏休みを利用してタイに赴き、東北タイの農村で 3 日間農家に泊まり込んで、その生活を体験しつつ、各ホストファミリーの家族構成や就業状態を調べた。今回の小諸市訪問はこうした一連の学習の一部として、日本農村の社会構造と地域振興の関わりについて自分の目と耳で学ぶことが目標であった。なお、訪問日時は 2017 年 11 月 11 日～12 日である。

調査地として選ばせていただいたのは滝原と呼ばれる地域である。滝原区は「たきばら駅」というコミュニティによる農産品販売所を立ち上げ運営している実績がある。また地域ぐるみの灌漑管理がおこなわれている。こうしたことから地域社会の伝統的な協同の仕組みと地域振興への組織的な取り組みの関係を学ぶ上で適当な地域と判断した。地域リーダーの方々にご協力いただき、滝原区の地域社会としての構造と地域振興の取り組みについて聞き取りをすることができた。

本報告書では、まず滝原区の概要を紹介した上で、学生の質問に対する地域リーダーの応

[1] 重冨ゼミは、農業・農村問題、途上国の開発問題をテーマに学習している。

答を要約してみたい。今回の訪問で印象的であったのは、日本の農村社会についてほとんど知識も経験もない学生の、いわば「素朴な質問」に対して、地域リーダーの方々が、学生の思い違いを解きほぐすように丁寧にお答えいただいたということである。そうした視点の違いをできる限り意識して聞き取り内容を要約してみたい。

上記の調査とは別に、重冨はゼミ生に小諸という地域社会を経験したとき「すごい」と思ったことを見つけて書くように課題を出しておいた。今時の学生は、それを「ヤバい」と表現する（ゼミ生によれば、すでにこの用法は広辞苑に載っているそうだ）。この感想文、「小諸ヤバい」を本報告書の最後に付しておく。

今回の調査は小諸市役所農林課農業ブランド振興係の佐藤工係長のアレンジで可能になったものである。佐藤係長には重冨の事前調査におつきあいいただき、滝原区の方々への調査依頼と学生訪問の日程調整をしていただいた。また小諸市市民協働推進係の鈴木一枝さんには聞き取りのサポートをしていただいた。調査当日は、あとで詳しくご紹介する３人の地域リーダーの皆さんに長い時間おつきあいいただいた。また、文化祭準備中の滝原区公民館とたきばら駅にお邪魔して、そこにおられた地域の方々とも歓談をすることができた。このほか、マンズワイン小諸ワイナリーにも赴き、ブドウとワイン作りについての説明を聞いた。実際に栽培されているブドウを間近に見ての説明は、非常に印象深かった。宿泊は糠地集落の農家民宿、青雲館にお願いし、地元産の農産物と満天の星空（＋流れ星も）を満喫する機会を得た。また民宿天池荘のご主人のご厚意で、早朝のリンゴ狩りを楽しむことができた。「黄色い声」が一帯に響いたため、ご近所の方が何事かと見に来られるほど、学生は大喜びであった。これら暖かく我々を受け入れ、ご協力いただいた小諸の皆様に、心よりお礼を申し上げたい。

２．調査地の概要

小諸市滝原区は大里地区に属する行政区で、地域全体が中山間の傾斜地に立地する。滝原区の中には６つの集落があり、それを地元では「地区」あるいは「部落」と呼んでいる。滝原区の歴史は詳らかではないが、かつて「たきはら」という村があったという言い伝えがある。区の鎮守である長倉神社が本郷と呼ばれる集落の外れにあって、本郷地区には大きな土倉のある家屋が多いこと、また他の地区はその本郷からの移住者が作ったものであるとの伝聞があることなどからすると、もともとは本郷地区を居住区域とした藩政村であったのではないだろうか。滝原区としての共有林（区有林）をもっていることからも、そのように想像するのが妥当であろう。現在でも滝原区として公民館の管理運営をおこなっているし、区内を流れる用水路管理の指揮主体は区である。公民館には、区の役員名を書いた札が役職別にかけられていたが、それは区の組織構造を目で見える形で表したものである。このように滝原区は財産を有し、ひとつの地域組織として自治の実体をもっている。

その一方で、各地区も一定の自立性をもった住民自治組織となっている。地区レベルにも

小規模な集会所が建てられていて住民が集うことができるし、鎮守もあるそうだ。そして用水路の維持管理作業は滝原区の指揮のもと各地区が作業を分担する形でおこなわれている。地区の集会所（久保生活改善センター）には滝原区の公民館同様、役員の名札が役職別に掲げられていて、地区がやはりひとつの組織体であることが見て取れる。

これらの観察から想像するに、人々の帰属意識は、おそらく区と地区の両方にあるのだろう。共有林と水をコントロールする権限をもつ区（滝原区）が人々の経済的な再生産を可能にする共同体であり、その共同体の維持存続に必要な人員の動員を担うのが地区と理解すればよいのではなかろうか。

現在の滝原区は小諸市の他区と比べてどのような特色をもっているだろうか。学生が『統計こもろ』（2015 年版）を用いて調べたところ、滝原は他区と比較して、農業就業人口比率が高い一方で、高齢者比率が高いということがわかった。総世帯数 189 戸のうち農業世帯は 82 戸、総就業人口 293 人のうち、農業就業者は 76 人である。農家のうち 80 戸が販売農家であるから、ほとんどが農産物の販売をおこなっている。農地の 4 割強が水田、5 割が畑地となっており、果樹園は小諸市内他区に比べると相対的に少ない。区の南部に県道 80 号線、79 号線が通っており、地区外との自動車によるアクセスはよい。

３．学生の問いに対する地域リーダーのレスポンス（応答）

我々の聞き取りにご協力いただいたのは、滝原区長の白鳥仁志氏、区内で農業を営む佐藤立夫氏、そしてたきばら駅の創設者である柳沢乃ぶ子氏のお三方である。聞き取りに先立って、小諸市農林課の佐藤係長から中山間地の地域振興の現状と課題についてレクチャーがあり、続いてお三方より簡単な自己紹介があった。その後、お三方に対して学生が質問をしていった。

学生の関心は、まず滝原における農業の状況や今後の方向性に向けられた。なお、学生は聞き取りに先立って佐藤係長の案内で滝原区内を歩いて回り、農地が斜面に展開し、かつ一枚一枚の水田が小さいことを見ている。

地域リーダーによると、この地域は伝統的に稲作と養蚕の地域だったそうである。養蚕がなくなった後、それに代わる規模の商業的な作目を導入できていない。学生が、野菜や果樹はどうか、と尋ねたところ、土地が粘土質のためそれらの作物には向いていないとの答えであった。大規模な野菜作や果樹作ができないとしても、小規模で作ることは可能であり、実際ほとんどの農家がある程度の販売をしている。そうした少量他品目の生産物の一部が地域の直売所「たきばら駅」で売られている。たきばら駅は小さな直売所であるが、最盛期には地域のコメ販売額を超える販売額があったという。マーケッティングの工夫次第で、小規模生産でも経済効果が得られる好例といえよう。

もうひとつの主作物である稲については、やはり耕地の狭隘性が問題になっている。小諸市で圃場整備事業が行われたときに滝原区でもその実施を検討したそうだが、結局合意に

至らなかった。それゆえ現在まで一筆一筆の水田が小さく、不整形なままにおかれている。これが稲作のコストを高める原因となっているだけでなく、水田を借りて経営規模拡大をはかろうとするインセンティブを下げている。統計で見たように滝原区の高齢化率は高く、その少なからぬ高齢者が農業従事者であろう。農作業が難しくなった農家に代わって農地を生産的に利用する体制を作りにくい状況といえよう。学生が率直に、農業経営で利益は出ているのか、と質問したのに対して、「人件費まで入れると赤字である」との答えが返ってきた。つまり農家は自家労賃を削って農業経営をおこなっているということである。

農業で不足する収入は、農外所得でカバーされている。学生が農外の就業機会について尋ねたところ、地元の会社勤めの人が多いということであった。ただしそれは必ずしも小諸市内で完結しているわけではなく、近在の市町村（軽井沢町や上田市など）も含めてのことのようだ。小諸市から出て行った人が小諸に戻ってくるときには、まず農外就業の場所を確保することが必要である、という。逆説的であるが、農業の振興のためには、農業以外の振興が重要ということになる。

次に学生の質問は、地域の活性化を地域の人たちがどう進めようとしているのかという点に移った。地域の人たちが地域をどうしていくのか、話し合うような場や機会はないのか、という学生の質問に対する地域リーダーの答えは、次のようなものであった。

そうした集まりのようなものは滝原区にはない。地域をどうするか、というような「大上段にかぶった」働きかけをしても、住民は反応しないという。むしろ別の目的での集まりの中で、地域の共通問題が話に出る。たとえば道路や水路を共同作業で清掃するときなどに話しをするという。あるいは直接支払制度のグループ[2]でそうした話題が出るという。

同様のことは「たきばら駅」の立ち上げ経緯からも窺い知ることができる。滝原区は「たきばら駅」という農産品販売所を小諸市の中で最初に作ったコミュニティである。言ってみれば、これこそ地域振興の活動である。立ち上げの当事者である柳沢氏によれば、農村女性推進委員を区長から頼まれた柳沢氏が最初に行ったことは、料理を作るなどの活動から気心の知れる仲間を作ることであった。その仲間が他の地域を見学に行って見たものが、自分たちの生産物を売る小さな販売所であったという。それが、1991 年に、当時は畳 2 畳分の広さの販売所開設につながった。

現代社会において、また特に都会において、我々が通常所属しているのはフォーマルな組織である。会社、大学、部活など、いずれも明確な目的を持ってその目的を達成するために人々の協力を組織する仕組みである。しかし地域社会で何らかの組織を作るという作業は、目的に沿って人々が行動するというよりも、人々の目的を特定しない（あるいは別の目的を持った）行動の「副産物」のような形で始まるのが普通だ、というのが地域リーダーの言わんとしたことであろう。地域リーダーによれば、地域をどうするか、というような話は、か

---

[2] 直接支払制度とは、中山間地域等直接支払制度のこと。中山間地の傾斜地において農業を継続するための地域の共同活動に対して補助金が支給される。この制度の受け皿となる組織がここでも作られており、白鳥氏はその代表になっている。

つて青年団や消防団の中で話されたという。これも同じことで、消防団は火災に対応するのが目的であるが、おそらくその集まりの中で消防とは別の話題が交わされて、それが地域をどうするかという話になり、場合によっては現実の行動につながったりしたのであろう。質問した学生が想定していたのは、フォーマルな組織化の過程であったが、コミュニティにおける住民組織化の過程は、目的を掲げてそれに賛同する人が集まって、目的達成のために協同する、というような、フォーマルな組織過程とは異なった過程をたどる。

こうした地域社会の「知恵」を理解することが、地域振興（発展途上国では地域開発、コミュニティ開発と呼ばれる）の上で鍵になる。行政とはフォーマル組織のひとつであり、それが政策的に地域振興を働きかけるとき、当然のことながら明確な目的と実施組織を用意する。小諸市が地域振興を行う場合も同様である。しかし滝原区での聞き取りからわかったことは、そうしたフォーマルな働きかけは、意図した効果をもたらさないかも知れないということである。そこで必要になるのは、地域住民の組織化過程が起きるような場や機会を作るという関わり方である。たきばら駅ができるきっかけとなったことが、農産品販売所を作るプロジェクトではなく、女性の交流の場であったこと。地域振興を話す場が、消防団であったことを想起しよう。

実は小諸市は、そうした働きかけをすでに試み始めている。重冨が佐藤係長から聞き取りしたところ、「AGRI　CAFE（アグリカフェ）」と称して、地域の蕎麦店を使って住民が会話する場を定期的にもっているそうだ。こういう行政の働きかけ、予算の付け方は、地域社会の組織論理を前提にするならばきわめて妥当なことのように思える。この「AGRI　CAFE」からどのような組織活動が生まれてくるのか、これからの動きを楽しみにしたい。

４．小諸ヤバい―学生の驚き―

上記の調査から学んだこととは別に、学生はそれぞれ小諸でいろいろな体験をすることができた。その中で彼らが「ヤバい」と思ったことを、以下に紹介する。

10 月に広辞苑が 10 年ぶりに改正され、約 1 万語が追加された。その中には、これまで危険という意味で用いられてきた【やばい】という言葉に、「のめりこみそう」という意味が追加されている。本稿で用いる【やばい】の意味はこれであり、本稿では、私が 11 月に訪れた際に感じた小諸市のやばいについて述べる。

まず、小諸の自然がやばい。中山間地域に位置する小諸市では、緩やかな斜面の山々に囲まれ自然を感じることができる。特に私が小諸市を訪れた 11 月は、紅葉の季節であったため、色鮮やかな木々に囲まれる。これは都会では到底見られない景色であった。フォトグラファーや季節を感じたい人がまさにのめりこみそうな場所である。

次に小諸のワインがやばい。小諸市にはマンズワイン小諸ワイナリーがあり高級ワインの製造を行っている。降水量が少ないことや、昼夜の気温差が激しい小諸では甘みが凝縮した小粒なブドウを収穫することが可能で、それ故に、日本が認めるワインを味わうことがで

きる。ワイン好きにとっては必見のやばいスポットだ。
　他にも小諸市には沢山のやばいがある。何か新たなやばいを探している人は一度訪れてみてはいかがだろうか。（RKS）

11 月 11、12 日に長野県小諸市を訪れた。小諸市は自然が豊かで空気が澄んでおり、都会では滅多に見ることが出来ない満天の星空を観察することが出来た。

　私が今回のゼミ合宿の中で特にヤバいと思ったのが、小諸駅に設置されていた「料金箱」である。最近ではスーパーなどで野菜を買う人がほとんどで、野菜の代金を支払う料金箱を見かけた時はヤバいと思った。私の隣人は農家で、幼い頃は野菜のかごから必要数取って代金を料金箱に投下していたが、近年その箱は撤去され、野菜を買うには直接農家の人に欲しいものを伝えるものに変わってしまった。聞き取り調査の中のお話にもあったように、料金箱からお金を盗む人や代金を支払わないで野菜のみ取っていく人がいたという。この形が続く背景には、小諸の人々のあたたかさがあるからこそだと考えた。また、スーパーに並んでいる野菜より半額以下のものが数多くあり、とても魅力的で、また訪れる際には小諸のおいしい野菜をたくさん買いたいと思った。（RH）

　小諸はデートスポットとしてやばかった。
　11 月中旬の小諸はちょうど紅葉シーズンで、懐古園や辺りの山々はとても美しかった。その中を寒いねって言いながら歩くだけでも、片道 2 時間かける価値があると感じた。あの紅葉の中でとった写真はどれも映えていて、写真を撮る過程も楽しかった。また、眺めの良い地元の温泉も普段の疲れを癒してくれた。
　極め付けは満点の星空である。都会育ちのわたしにとって、あの星空は一生忘れられないものになった。小諸市滝原の少し山奥でみた空はどこを見渡しても星、星、星。どの星もはっきりと見え、逆にオリオン座などの大きな星座が目立たないほどであった。わたしたちが泊まっていた晩はちょうど流星群が来ていたようで、なんとも幸運なことに流れ星も見ることができた。
　紅葉をみて楽しみ、疲れと寒さを温泉で洗い流し、あの星空の下を歩いた 2 人の仲はより強いものになるのではないか。わたしも素敵な相手と再び小諸にいつか行けることを願っている。（HM）

　このゼミに入った当初から、1 つ上の先輩方が小諸に合宿へ行き有意義な時間を過ごしたということを聞いていたので、今回小諸市に合宿に行くことをとても楽しみにしていた。学校での事前学習でも小諸の魅力をたくさん知り、早く行きたいとずっと思っていた。そして

当日、小諸は落ち着いた雰囲気の場所で、自然豊かで空気が気持ちよく、とても心が落ち着いた。そんな小諸に着いて、驚いた（ヤバい！と思った）ことは、駅の改札を通る時に駅員さんに直接切符を渡して通るということ。これは都会にいては経験できることではないし、初めてであったのでとても貴重な体験ができて嬉しかった。手渡しで切符を渡すことで顔を見て挨拶することができるし、小諸に来たぞお！というワクワクする気持ちになった。この最初の改札で、小諸の雰囲気の良さや人の良さを知ることができ、気持ち良く 2 日間過ごすことができた。（CS）

今回、実際に小諸に行き、小諸の街を探索する中で、たくさんの小諸の良い所を見つけることができた。空いっぱいに広がる星、透き通った空気、紅葉はとても素晴らしく、小諸でしか体験できないことばかりであった。

私は特に、たきばら駅で売られている野菜の価格に衝撃を受けた。その日売られていたキャベツの価格はなんと 80 円であった。キャベツは都会で売られているキャベツよりもはるかに大きく、質も良いものであったのにも関わらず、この値段というのは信じられなかった。都会ではこのような価格は考えられない。また、小諸駅でも新鮮な野菜が種類豊富で、価格が安く販売されていた。これは、家庭で作った野菜をお裾分けの気持ちで出品している小諸の人々だからこそできることなのだと思う。自分の作った野菜をみんなにも食べてもらいたいという気持ちで野菜を作る小諸の人々はとても素敵である。

私はこの合宿を通して、自然豊かな小諸の街をもっと多くの人々に知ってもらいたいと思った。今後は、四季折々の小諸を友人や家族を連れて訪れ、もっとヤバい小諸を探索したい。

最後に、このような体験をさせていただきありがとうございました。（ANK）

今回、11 月中旬の長野県小諸市を訪れて、都会とは全く異なる自然豊かな暮らしの魅力を知った。この時期はちょうど紅葉が見ごろを迎えており、特に懐古園の真っ赤なもみじは非常に美しかった。見上げると紅葉が一面に広がるあの景色は、私の住んでいる地域ではなかなか見ることができないため、一際感動が大きかった。

私が「小諸ヤバい」と感じたものは、二日目の朝ごはんでいただいたホットミルクと味噌汁である。特にお味噌汁がとてもおいしかった。私は、好きな食べ物を聞かれると必ず味噌汁と答えるのだが、今回いただいた味噌汁は本当に深い味わいがして、小諸の寒い朝の中で体が芯から温まった。また、漬物やフルーツなどもとても美味しく、小諸の食べ物はどれも非常に魅力的だと感じた。ごちそうさまでした！

最後に、今回このような機会を設けていただき、本当にありがとうございました。この二

日間は、都会暮らしの私にとって非常に貴重な経験でした。小諸は、また行きたくなる素敵な場所だと心から思います。（RKK）

私たちは滝原地区にある民宿の青雲館に宿泊した。私はそこで働く従業員のおばあちゃん達に「ヤバイ！」と感じた。それは、おばあちゃん達の真心のある心の温かさである。心温まる食事を提供して下さり、片付けの際には気さくに話しかけてくださった。そして、いわゆる形式張ったおもてなしではなく実家での和気藹々としたお出迎えをしてくださり和んだ雰囲気を作ってくださった。ご飯がおいしいことを伝えた際には、「嬉しいわ」と微笑んでくれた。その時の笑顔は優しく暖かく、従業員の方としてではない実家の祖母のような面影があった。それは、どこか僕たちが都会生活で忘れてしまっているようなものであったのかもしれない。

別れ際におばちゃん達が「またおいで」と言ってくれた時も、実家の祖母を想起した。この地に再び降り立ちたいと思い、同時に実家にも帰りたくなった。そんな小諸市の滝原地区は田舎から都会で一人暮らしをしている私にとって、家族の暖かさを思い出させてくれる場所だった。滝原地区では、ヤバイくらいの心温まる愛情で溢れていた。（RS）

11 月 11、12 日にゼミ合宿で長野県小諸市に伺った。小諸市は自然に満ち溢れ、空気がとても澄んでおり、気持ちの良い場所であった。合宿中、東京では絶対に見ることのできない星空や人情味溢れる地域の人々に感激したが、私が一番ヤバいと感じたのは小諸のりんごの美味しさである。私の家族が全員青森県出身ということもあり、幼い頃から青森県産のりんごを食べて育った。そのため、長野県もりんごで有名であることは知っていたが、口にしたことがなかった(無意識のうちに口にしていた可能性もある)。また、勝手ながらに長野りんごに闘志を燃やしていたが、実際は、りんごの中の蜜がとても濃く、甘い中に爽やかな酸味もあってたいへん美味であった。敵視してすみませんでした。（YN）

私が小諸市のここがヤバい（すごい）と思ったところは景色です。東京とは違って高いビルや建物がほぼないために、どこにいても空一面を見ることができます。紅葉はとても空に映えて見え、太陽も眩しく綺麗に見えました。夜になるとただでさえ少ない街灯が邪魔だと思えるくらい、綺麗で壮大な星空が見えます。まるで星が降ってきているかのようでした。心から感動したのは、小さな流れ星が何度も見られたことだけでなく、大きな流れ星が 5 秒ほど目に見えるように流れていた瞬間をゼミ生で共有できたことでした。今でもその瞬間の感動は忘れることができません。日本でこんなにも美しい流れ星を見られるとは思ってもみなかったです。東京でも場所によって

はオリオン座が見えますが、小諸市では、どれがオリオン座か本当にわかりませんでした。星空は写真に写らないため、記録に残せませんでしたが、紅葉などの景色の写真は撮ることができたので厳選したものを添付させてください。（ANG）

今回 11 月 11、12 日で訪れた長野県小諸市は自然豊かなとてものんびりした場所でした。2 日間という短い時間だったが、様々な場所を訪れ、様々な人達と交流することができた。都会では見ることのできない夜空や感じる事のできない人の温かさなど感じることがたくさんあった。

この 2 日間で私が思った小諸の一番やばいところはなんといっても多く残る自然だと思う。季節がよかったこともあり、とてもきれいな紅葉を見ることができた上に、夜は空気が澄んでいるため満天の星空を見ることができた。かく言う私は生まれが香川の田舎の方で自然いっぱい、星空満点な地域で育ったのだが、近年では昔田んぼだったところに家が立ち並び、どんどん人口が増えてしまい自然が減少していると感じていた。小諸市の全てを見ることができたわけではないが、人の温かさや自然の多さは他の観光地にはない小諸（滝原地区）の魅力だと私は思いました。（SN）

長野県小諸市、先生からこの土地のことを聞かされるまで正直知らなかった。話を聞くと明治学院と深い関わりがあると知り興味を持った。そして、ゼミ合宿で訪れた小諸市。一言で言うと田舎町。元々栃木の田舎出身である私はどことなく馴染み深い町だった。自然があふれていて空気が美味しい町。中でも小諸のここがヤバい！！と思った瞬間は夜に仲間たちと見た流れ星である。栃木でも夜になると星は綺麗に見えるが、こんなに綺麗な星空を見たことは初めてであった。星空をずっと観察していると大きい流れ星が一つ流れてくるのが見えた。初めて見る流れ星にとても興奮し、少しの間ドキドキが止まらなかった。仲間たちと感動を分かち合い、とても充実した夜だった。実家は栃木であるが、現在神奈川県の都会の町に住む私は、こういった自然と触れ合う喜びを忘れていた。小諸市は自然の素晴らしさを再確認できるとても良い街であった。是非、また訪れたい場所である。（MS）

今回訪れた小諸市は、とても魅力あふれる場所だった。私は小諸を訪れるのは初めてだったが、とても充実した 2 日間を送ることができた。

小諸に来て一番印象に残っているのはやはりあの広大な自然である。あの綺麗な風景と澄み渡る空にヤバいと感じた。合宿の事前学習で、小諸市は日本国内でもかなり晴天率の高い地域だということを聞いていた。私たちが訪れた 11 月 11 日と 12 日も運よく晴天に恵まれ、昼間は真っ青な空が広がっていた。夜も、空気が綺麗なおかげで空一面に星がはっきり

と見え、都会では絶対に味わうことのできない感動を得ることができた。小諸は山に囲まれていることもありあちこちで赤や黄色の色鮮やかな紅葉も見られた。高台から小諸を見渡した時の景色も忘れられない。

小諸はどこを切り取っても美しい自然を臨める場所だと感じた。ぜひ夏頃にも、もう一度また違う景色の小諸を見に訪れてみたいと思う。（MK）

小諸の夜空を、目の当たりにしてヤバイと感じた。普段、あまり自然に触れることがなく、都市化が進められてきた地域に住む私は、無意識のうちに自然は人間によってコントロールされているという認識をしていたと思う。しかし、今回小諸を訪れたことで、私の中の概念が変わったといっても過言ではなく、自然は人間と共生しているということを改めて感じた。

夜空には沢山の星がキラキラと輝き、私たちを惹きつけた。小諸は寒かったが、そんなことも忘れてしまうくらい 1 時間は眺めていた。魅了されてしまうとは、こういうことをいうのかと思った。あんなに綺麗な夜空を今までみたことがなかったし、これからもそう簡単にみることはできないのではないかと思う。小諸から帰ってきても、あの夜空を忘れられないでいる。あれから、よく夜空を眺めるようになった。しかし、小諸の夜空と比べてしまい、物足りなさを感じてしまう。そして、小諸の夜空が私に、もう 1 度小諸を訪れたいと思わせてくれる。（AY）

（以上）